



北海道バスケットボール協会
指導者育成専門委員会
2015/11/10(火)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 172

『第45回北海道中学校バスケットボール大会からの考察』

今年の全道中体連における男女の準決勝・決勝の試合を見て、「どのようにすれば全国に勝ち上がるのか」というような観点で、Jr連盟の強化委員を中心にまとめてみました。大会が終わってから、すでに2ヶ月が過ぎてしまったことをお詫びします。

女子準決勝 【神居東 対 新川】

塚本 総朗

神居東の第1ピリオドは守備の安定はもちろんのこと、攻撃面でもボールがよく回り、速攻や外角シュートを織り交ぜながら効率よくオフェンスをしていた。しかし、インサイドを攻めてくる相手に対して、ディフェンスが後手に回り、リバウンドをなかなか取れなくなったときのオフェンスが外回しだけになってしまった。相手のディフェンスを切り裂くだけのドライブ力や、外から射貫くシュート力があれば展開は違っていたかも知れない。タイムアウト明けからはベンチの指示通り動こうとしていたが、相手の対応に合わせたもう一つ先の手を選手自身が考えられるようになると自分たちの流れに持ってこられたのではないかと感じる。

新川については④畑山というエースガードが中心にゲームを組み立てていた。自分のマークマンをかわし、味方に攻めさせることができている。素晴らしいセンスをもったガードで、北海道に彼女を1人で抑えられるプレイヤーはいないが、もし押さえられた時に他のメンバーでどれだけの攻撃ができるかが全国大会のカギになるのではないかと感じる。オフェンス、ディフェンス共に高さを生かした守り、インサイドにタイミング良く入って攻めてくる攻撃と、自分たちの良さを生かしたバスケットボールを展開していた。両チーム共に良さを生かした試合であったが、今後のレベルアップの為によりスピーディなプレイに持って行くための判断力をお互いに磨いていく必要があると感じられる。

女子準決勝 【東月寒 v s 滝川明苑】

大桃 悠輔

立ち上がりは、どちらかが仕掛けるというより、お互いに様子見の入り方であった。東月寒にも硬さが見られ、1Qのシュート成功率は低かった。しかし、4番のオフェンスリバウンドが素晴らしく、セカンドチャンスによる得点に救われた。

また、東月寒は1対1のディフェンスプレッシャーが厳しく、ボールが入った瞬間にハーフアームの距離まで詰め、滝川明苑に苦しいショットを打たせていた。

対する滝川明苑は、そのディフェンスを嫌がり、苦しいショットがことごとく外れ、前半2点しかとることができなかった。しかし、ゲーム後半からファールをもらうドライブが増えてきたことや、2-2-1ゾーンプレスの足が動き始めたことから、4Qは15得点取ることができた。

滝川明苑よりも東月寒の方が個々の判断力やシュート力は高い。しかし1Qは、滝川明苑のディフェンスの頑張りによって1対1を守っていた。ただし、リバウンドやルーズボールへの執着心は、東月寒が優れていたため、徐々に点差が広がっていった。また、相手ディフェンスを嫌がり、思い切ったドライブが少なくなってしまうように感じる。苦

しいときこそ、ファウルをもらうようなプレーヤーがいるとチームは強くなるのではないか。

北海道大会を勝ち上がるためには、イージーなシュートセレクションを選び続ける判断力を磨くこと、シュート力をつけることが必要である。しかし、大会2日目を勝ちきるためには、ルーズボール、リバウンドに入り続けられるかどうかだと思う。今大会では、東月寒4番、5番のオフェンスリバウンドがとても素晴らしく感じた。

女子決勝 【新川 対 東月寒】

金山 大輝

今年の全道大会女子決勝は、大会のトーナメントを順当に勝ち上がってきた東月寒中学校と接戦を勝利してきた新川中学校の対戦となった。お互い実力のあるチーム同士の対戦であったので、観戦している側も、白熱したレベルの高い対戦に感動したであろう。そのような中、新川中学校、東月寒中学校ともに全国大会でどんな成績を収めることができるのか非常に楽しみである。新川中学校は、#4を中心としてオフェンスが全て組み立てられるので、#4を封じられたときに、焦らないで次の一手を出せることが全国で勝ち上がるポイントの一つになるだろう。#4だけに頼るのではなく、いろいろなところから仕掛けることができる。そんなチーム力の底上げが、必要だと思われる。全国大会では、能力も上、技術も上、という選手がゴロゴロいるので、全道大会からもう一つレベルを上げて挑んでほしい。

一方、東月寒は、攻めのポイントやバリエーションも豊富で、運動量と高さを活かした質の高いバスケットがとても魅力的である。ただ、身体接触の部分でもう少し力強さがほしいと思われるが、高さが無いわけでもないので全国でどのように戦えるかが楽しみである。

どちらのチームも、今年の全道大会では、間違いなく実力通りのチームが勝ち上がった結果である。北海道代表として、全国の強豪チームに負けない、粘りのあるバスケットボールで頑張してほしい。

男子準決勝 【帯広西陵 対 札幌】

鈴谷 勉

1. 良かったところ

- ・両チームとも、一人一人のプレーヤーが自分の役割を理解し、その役割を果たそうとしていた。
- ・西陵中は、札幌中のゾーンプレスに対して、見事に対応し、3Qにリードを奪うもととなった。突然のディフェンスの変化に対応する能力が高い。
- ・両チームともに個々のプレーヤーの良さや特徴を生かしたゲーム運びをしていた。

2. 足りなかったところ

- ・男子のゲームにありがちな、シュート合戦の様相を呈していた。もう少し、2対2や3対3でつくってから攻めるなど、ディフェンスを崩してからシュートにもっていく場面があっても良いと思う。特に勝負のかかった4Q残り3分間の戦い方は、とても重要で、両チームとももう少し工夫があっても良いと思う。特に西陵はシュートセレクションに一考の余地があったと思う。

3. 北海道大会を勝ち上がるには

- ・西陵中にも全中出場のチャンスは十分あったと思われる。シュートセレクションの判断、決めなければいけない場面で決める確実さ、マンツーマンでしっかり守る力などがもう少しあれば、と思う。
- ・札幌中は全中に出場するが、ディフェンスの力がアップすれば優勝の可能性も上がると思う。さらに特定の選手に偏っている得点を、より多くの選手に広げるためにも一人一人のスキルアップが必要であると思う。

大会を通じて言えることではあるが、東海大四はバスケットというものを非常に理解しているように感じる。オフェンスにしてもディフェンスにしてもファンダメンタルが徹底されており、一つひとつのプレイの選択肢が多く、その中での判断力も長けている。

その結果、東海大四の相手側の選手が迷いや、不安感を感じ思い切りプレイをできなくさせていた。これは、見る側からすると、なぜもっと思い切ってやらないのだろうかと感じる部分もあるが、対峙したときの独特な感覚と巧みさは様々なものに裏付けられている技術と練習の賜物ではないだろうか。

準決勝でも、派手さはないものの、シンプルなプレイを積み重ねられること、相手の心情をしっかりと理解した、ポイントを押えたディフェンス。その差が最終的な点差に繋がったのではないだろうか。

対する深川は非常に能力があり、プレイのキレ、華やかさを兼ね備えている。他の全道出場チームはもちろん、東海とも互角かそれ以上のプレーヤーを多く有しているように感じる。しかし、爆発力はあるものの、ゲーム展開の中で相手が嫌がるような点数の積み重ね方、東海がフラストレーションを溜めるようなディフェンスというのが足りなかったように感じる。

全体を通して、接戦を勝ち抜いてきた深川は非常に勝負強く、素晴らしいプレイが随所に見られ、プレイヤーひとつの質にはほとんど差はないと思われる。ただし、東海と深川の差は、ゲームの勝ち方を理解して、プレイの選択の判断力ではないかと考えられる。そして、このゲーム感を獲得することが、北海道大会を勝ちあがるために非常に重要であるように感じた。

ほぼ北海道選と札幌選抜の選手がスタートメンバーを占めている両チーム。決して身長的高いわけではないが、体幹がしっかりしているためプレイの軸がずれず、走力・跳躍力などの身体能力に優れていた。そして日々の努力に裏付けされるオフェンス技術が非常に高く、見応えがあった。

東海は5人で戦っていることもありスロースターター。対する札幌は、最初から自分達のペースをつくれて、思い切りよくシュートを放れるチーム。ゲーム後半、両チームのペースがちょうど入れ替わった時に勝負が付いた感じが。

全中で頂点を目指すとなると3日間で6試合。チーム事情を考慮した東海のペース配分が、連戦を勝ち抜くためにどう機能するのかが見物。札幌は思い切りの良いバスケットボールを、全国でさらにレベルアップするディフェンスを前に、4ピリ最後まで足を動かして、攻め切ることができるかどうか。

今回の決勝で、苦しい展開の中、チームを救ったのは、多少のコンタクトにも動じない、力強いオフェンスリバウンドとねじ込むごとく決めたリバウンドシュートであった。中学以外のバスケットを拝見する機会があって改めて思うことは、「やはり勝負の決め手はリバウンド。」素晴らしいシュート力やセンスを持つ選手が増えてきているからこそ、それを拾う勘に優れた選手がチームにいれば怖いものなし。

全国・北海道で勝ち上がるためには、どんな環境であっても最後までタフに走り切る精神力と走力。そして、決して縦に切らせないディフェンスの足。確率の高いシュートや正確なプレイを生み出すストップやピボットの技術をいかに高めるか。そしてこのパフォーマンスを維持するために、個々の能力を高め、ベンチの選手をいかにコートに送り出せる状態にできるかが、頂点を目指して連戦を勝ち抜くポイントなのかもしれない。